

●竹蛇籠(半分)54本の製作10月25日に完成 製作本数*54本 延べ人数*175人 期間*9月14日~10月24日 作業日*25日、関わっていただいた皆様:17人(福井 太田 大釜 深田 南良 有田 播川 山田 小林 熊谷 長谷川 表村上 仙北屋 青代 大村 山村)里山の会は数年に渡って秋の取組が蛇籠の製作となってきた。これだけ多人数を要して、長期間にわたって、関連する機関の協力を得ながらの取組みはなく、ほとんどその日その時間に終了する取組みがほとんどであった。一定期間継続しての事業はこれまでなかった。それが2016年を除いて4年間の継続となっている。粘り強く取り組まなければならない課題であった。特に今年(2019年)は①竹蛇籠の編み方の冊子。②映像で竹蛇籠の製作を残す取組み。③里山の会はなぜ蛇籠に取り組むのか。④聖牛の組立の手順書の冊子をまとめ上げました、同時期に⑤ヤマトサンショウウオの活動の調査観察のまとめ、⑥蛇籠の製作講習会の継続開催とシンポジウムの開催。⑥里山の風に吹かれようのリーフの完成。⑦市民文化祭の展示物の3分割で作成する中での取組みとなりました。どれ一つとっても通常なら一本仕上げるのに相当な時間とエネルギーが必要になる作品です。それを通常の取組をこなすように、人手が足りないとか、時間がないとか言いながら、最後には立派に仕上げられました。個人一人一人は小さな力しか発揮できませんが、100人近くの人が集まる毎週水曜日の事務局会議を開いているから、この1か月で、ものすごい成果を手に入れているのだと思います。もちろん作品に仕上げるのには相当の経験時間の積み上げがあるからこそ、知恵を引きだせるので、簡単なことではありません。各人の積み上げが成果に見あがっているのです。

●26日自然環境保全京都ネットワークの分野別交流会(長岡京駅前のバンビオ)「田圃の生き物について」が開かれ、里山の会から太田理事及び金田さんが「サンショウウオの観察調査」について問題提起を行いました。他に雲ヶ畑から休耕田などを含むところの「希少植物の保全と生業とする農業の在り方」。亀岡地域から「天然記念物のアユモドキの保全と農業と地域開発」の問題提起がされました。三つの報告に共通するのは高齢化問題と後継者問題があり、農業(稲作を中心に)の継続問題が横たわっていました。希少な生き物の生育場所の確保と保全は、土地所有者の奮闘で守られるのではなく、広く地域一帯の理解が必要です。議論を深めてゆくと、広くは国民の意識に及ぶものであり、地球温暖化及び温暖化に繋がる課題である。このことに繋がっていくのではなかという国全体、地球の環境問題にまで及ぶ課題だと気づく集いであった。

●27日は三つの課題を同時刻に推進した特別の日であった。一つは城陽市緑化祭りであり。二つ目は竹蛇籠製作講習会最終日に当たりました。三つめは京の川の恵みを活かす会フォーラムでの活動発表の3イベントが重なった日であった。それぞれ分担して無事に役割を果たしました。随分と底力が付いたものです。

●城陽市の木津川運動公園(山砂利採取跡)での緑化祭りは9時から開始され、里山の会は毎年特に人気の取組となっている自分で作る綿菓子取組を中止しました。福知山での事故以来プロパンガスの使用にかなり気を使いますので中止としました。これまでは1時間待ちの人が出るほど人気の出る取組みでした。昨年は竹蛇籠の実物展示で来場者に大きなインパクトがあったように伺いました。もちろん綿菓子を楽しむにしておられた方には申し訳ないことでした。しかし今年の展示物は水質や木津川の植物などの充実した内容になりました。スタッフは12名となり、世界に二つと無い松かさツリーの説明を詳しく丁寧に聞いてもらえる良い機会となりました。これまでは丸型のテーブルから、会議机4脚の使用になって、来館者の皆さんが使い慣れておられて随分と機能的に

なりました。他の人の作品を見ながら作業が進められるので、良い雰囲気が出るようでした。会場では体験型の取組が少なく、天気が暖かく頃合いでしたので、若い子ども連れが昨年以上に集まってくれました。この日のために松かさツリーの台木の切断や、柱木の準備、松ぼっくりの取り付けなど丸鋸や鉛筆削り、ナンキンハゼの実への色付けなど随分と手間のかかる前作業を多くの皆さんの手で用意していただきました。城陽市の畠中さんによる連風あげも行われ、最高 225 個の風(約 450m) があがり周りの子供たちや大人から大歓声が起こりました。風あげにはちょうど良い秋風が吹いていました。皆様ご苦労様でした。

●京の川の恵みを活かす会フォーラム(中書島:京都大学ラボラトリー)では午前 9 時から挨拶に引き続き講演が始まり、午後から参加団体から活動報告が続きました。里山の会からは中聖牛の取組の報告として、木津川の特徴である砂河川と河床低下問題、魚種と魚類の数量低下を問題にして竹蛇籠の設置及び中聖牛の設置が河床地形の変化に及ぼす影響など京都大学防災研究所の研究に協力していることを説明しました。その他のグループはアユの遡上問題などに関する発言が多くありました。

●「里山の風に吹かれよう」のチラシ(A3 両面すり)が完成しました。大いに活用して里山の会の活動紹介に利用していただきたいものです。2020 年は里山の会が開始されて 25 年目を迎えることになります。広くご活用をお願いいたします。京田辺市の 9 月議会活動報告書の最終面で里山の会が紹介されています。大いにこの機会に本会の活動紹介に使っていただきたいものです。(風に吹かれよう)は本会事務所にあります

竹蛇籠-中聖牛取り組んで 4 年

11 月 23 日・24 日 8:30
中聖牛組立設置 玉石詰

11月24日(日)

取組の中間報告シンポジウム

13:00 開会挨拶 淀川河川事務 里山の会

報告 木津川における伝統的河川工法「中聖牛」の河川地形改変効果

田住真史 国土交通省中国地方整備局

報告 竹蛇籠製作を取り組んで

福井波恵 NPO やましろ里山の会 淀川河川レンジャーアドバイザー

講演 伝統河川工法による河床地形管理

竹門康弘 京都大学准教授

講演 木津川における土砂管理の課題と解決策

角 哲也 京都大学教授

場所 綴喜郡井手町 京都府立山城勤労者福祉会館

主催 NPO やましろ里山の会 京の川の恵みを活かす会 琵琶湖淀川流域圏連携交流会
淀川河川レンジャー・グループレンジャー

後援 京都府 奈良県 三重県 京都大学防災研究所 同志社大学 京田辺市 宇治市 八幡市 城陽市
名張市 伊賀市 久御山町 精華町 和束町 笠置町 南山城村